「ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2009」の審査と中間報告

今年度第３回を迎えた「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」は、昨年に引き続き「地域」「ボランティア」「明学生」をキーワードとし「明学生による地域への貢献を目的としたボランティア活動」をテーマに企画募集を行った。４月 13 日から６月５日まで応募を受け付けた結果、８企画の応募があった。応募数は約 2/3 近くに減ったが、これまで応募したことのない団体からの積極的な企画提案があり、学生と地域が連携した新たな活動が生まれていることが伺えた。

書類審査を経て公開審査会が６月 20 日（土）に開催された。応募した全８団体は、それぞれの企画内容について、５名の審査委員（大西晴樹学長、外部識者として白金地域より福井章人氏、戸塚地域より植田義明氏、ボランティアセンター長、同補佐）と学生ら一般参加者を前にプレゼンテーションを行った。引き続き行われた審査委員会では、「明治学院大学周辺地域への貢献度」、「継続的発展の可能性」、「企画の独自性・先駆性」、「実現可能性」の観点で評価があった。白金、戸塚地域の審査委員からは、全般的に「もっと計画段階から地域の方々に相談をもちかけ、地域の資源をより活用するという形で提案すべきである」と厳しくも熱いコメントをいただいた。審査の結果、６企画に「チャレンジ賞」（最大 10 万円）が、公開審査会での参加者からの投票の多かった１団体に「オーディエンス賞」が授与されることとなった。（企画内容と活動の経過は、次ページ以降の「活動報告」を参照）

今年度は特にキャンパス周辺でのボランティア活動がテーマであるため、両校地のコーディネーターがフォローアップも含めて受賞企画のアドバイスやサポートを行い、地域と学生の協働作業を支援している。11 月 25 日（水）に中間報告会を開催した。受賞団体はこれまでの経過や課題、地域との関わりからの学びについて報告した。当日は大学近隣の住民の方をはじめとして、社会福祉協議会や行政スタッフなどや卒業生、高校の先生や生徒など幅広い方が来場して下さった。継続的な取り組みを期待する励ましの言葉や、高校の先生や生徒からは、自分たちの学校と連携を進めてほしいという積極的な提案を頂いた。第２部では、受賞団体らによるグループワークが行われた。これは昨年課題となった助成団体同士のネットワークづくり、学生相互による学びの場づくりが目的であった。学生たちは活動を進める上での悩みや課題を出し合い、それをどのように解決を図れるのかなど、意見を出し合いながら交流を深めていった。こうした学生間の交流と学びの機会はワークに参加した学生からの評価が高かったが、今後は報告会に参加して下さった地域の方を交えての意見交換と学びの場作りにも取り組んでいきたい。チャレンジ賞の授与から半年が経ち、学生たちは地域における新たな活動を切り開いてきている。今後はこうした活動が、一過性のものとならず、地域に定着し育っていくことを強く期待し、私たちコーディネーターも力を尽くしていきたいと考えている。

（糸井）

戸塚で考える核問題　　―Peace ☆ Ring―

私たち Peace ☆ Ring は、「平和について学び、実践し、発信する」ことをテーマに明治学院大学横浜校舎を中心に活動している。今回、Peace ☆ Ring では、2009 年 1 月のオバマ政権発足以来、世界で見られる核廃絶へ向けた機運の高まりに乗り、学生の立場から地域に向けて核廃絶に向けての意識を高めるために何かできないかと考え、「戸塚で考える核問題」と題する企画を立ち上げた。

企画内容は大きく分けて２つある。１つは「戸塚で考える核問題」である。これは被爆者の方を招いての講演会や、自分たちで行なった学習や研究の発表会、他のイベントなどに参加しての報告会などを行うというものである。２つ目は、「Café du PRIME Annex」である。明治学院大学国際平和研究所の協力を得て、2009 年 4 月より、毎週火曜日のお昼休みに横浜校舎８号館の教室を使用し昼食をとりながらの勉強会を開催してきた。今回の企画では、学生だけではなく、一般の方々とも平和問題について議論したいと考え、この「Café du PRIME Annex」をより地域に開放し、キャンパスの周りにお住まいの地域の方々をお呼びして開催した。

戸塚で考える核問題では、８月に被爆者であり、原爆訴訟の原告団の一人である上田紘治さんをお呼びしての講演会と、自分たちで行った広島、長崎や世界の原爆被害について研究のプレゼンテーションを行った。講演者をお呼びしてのイベントは運営スタッフが少ない中で苦労することも多かったが、当日はとても有意義な時間となった。参加人数は、学生・一般の方を含め 20 名程度だった。講演をお願いした上田さんのお話は、これからの活動や学習のための励みになるものであった。またイベント後にも、原爆訴訟の問題について議論しとても勉強になったと同時に、原爆被害はいまだに続いている問題なのだと再認識することができた。参加者からも、すごく有意義で勉強になり良い会だったと感想をいただいた。イベントの企画・運営に関しては、全体として滞りなくスムーズに行えた。自分たちの学習のプレゼンテーションに関しては、それまでの学習をうまくまとめ、参加してくださった方々に伝えることができたと感じている。このイベントを開催しての反省なども多く残った。どうすれば単なる情報伝達にならずに、参加者一人ひとりが平和について考えるきっかけとなるような発表ができるかということや、講演者をお呼びしてのイベントで気をつけなければいけない事などを考え直すことができ、次につなげられる結果となった。

「Café du PRIME Annex」では、自分達の研究発表や先生の講演だけでなく、学外の NPO の方を招いての学習会や、横浜校舎のご近所にお住まいの方による講演など、さまざまな要素をとり入れた。題材に関しても核問題に限らず、歴史教科書問題やその時の旬な話題など幅広く扱い、参加してくださった学生や地域の方々と共に知識を深めることができた。毎週継続的にカフェを開催することがとても難しく苦労することもあったが、準備や参加者の方々との議論を通してとても学ぶものが多かった。

また Peace ☆ Ring では８月に新潟で開催された「第 21 回国連軍縮会議 in 新潟」への参加ツアーを

企画した。現地で会議を傍聴するとともに参加者へのインタビューや、会場前の公園のフリースピーチなどの行動を行った。平和への願いや、核問題について私たち若者がどう向き合うべきかなどについて、Peace Ring メンバー一人ひとりがそれぞれ聴衆と対話するような形で訴えたり、意見交換などを行った。実際の会議の場に参加するということが私たちにとり、とても大きな経験となり、またスピーチという形で発信することでより会議への参加を意義あるものにできた。この国連軍縮会議への参加についてもカフェで取り上げ、報告という形で地域や学生に向けて発信することができた。またその結果として、とても充実した議論を行い、そして知識を共有し考えを深めることができた。

今回のボランティアファンド学生チャレンジ賞でいただいた助成金に関しては、講演者への謝礼や国連軍縮会議で行ったインタビューで使用したマイクなどのビデオカメラの周辺機器の購入代などが主で、ほかにイベントの会場準備のために購入したガムテープや画用紙などの代金に充てた。

私たちの企画は現在も進行中であり、完了は 2010 年の 5 月ごろに予定している。今後の活動として、Peace ☆ Ring では 2010 年 5 月 3 日～ 28 日に NY で開催される「2010 年核拡散防止条約（NPT）運用検討会議」へ参加する。またこれに関連して参加の事前と事後でそれぞれ決起集会と報告会を開催しようと考えている。これからは、NPT 運用検討会議参加へ向けてメンバーの士気を高めると同時に、自分達の学習を進め会議への参加をより意義あるものにするべく努力することが大切だと考えている。また、カフェや各イベントを成功させるために、事前の宣伝などに力を入れ、地域の人や学生に一人でも多く参加していただき問題を知り、考えを深めてもらうために努力する。

私たちは、この機会に地域の方々と積極的にかかわることで、学生以外でも自分たちのように、核廃絶のための活動をしている先輩方がたくさんいるということを知ることができた。また、そういった方々とかかわることで自分たちの学習の足りない部分を認識したり、補ったりすることができた。そして、自分たちの活動を知り応援してくださる地域の方々に多大なる活力をいただき、日々邁進することができている。

「戸塚で考える核問題」の様子　2009.8.12

国連軍縮会議でのフリースピーチの様子　2009.8.28

（Peace ☆ Ring　国際学部国際学科 2 年　蓮沼佑助）

柏尾川沿い「桜ジョギングコース」調査

私たちは国際学部平山ゼミで社会調査を学んでいる。2009年5月、上倉田地区連合会から「柏尾川にジョギングコースを整備したいという計画案を考えているので、実際にジョギングコースを利用している人や日頃から柏尾川に接している人々にとって望ましいものにするためにはどうしたらいいのか、調査をしてほしい」という依頼を受けた。当初、町内会長らの計画は「柏尾川に新たな橋を架けて、新しいジョギングコースを作りたい」というものであった。しかし話し合いを進めるうちに「既存の柏尾川ジョギングコースの改善を図るのはどうしたらいいのか、ひいては柏尾川に関する改善案を出し合い、柏尾川を取り巻く環境をよくしたい」とように目的が変更された。そこで、私たちは住民が柏尾川に感じている課題やニーズ、改善案を調査する協力をすることにした。

具体的な内容・経過としては、まず柏尾川流域の住民である戸塚の人々の意見、要望を聞きだすためにインタビュー及びアンケートを行った。対象と方法は以下である。

インタビュー…ルーテル幼稚園保護者10名程度、ルーテル幼稚園先生5名程度、
ジュニオールサッカークラブコーチ
アンケート…東戸塚小学校3年生1クラス26名、東戸塚小学校5年生1クラス26名
東戸塚小学校保護者50名

インタビューやアンケートをお願いする人は、柏尾川を利用していると予想される柏尾川周辺施設をリストアップして、その中から自分たちが付近を歩いてみて観察し、大いに利用していると判断したところに調査への協力をお願いした。またルーテル幼稚園は、先生方だけでなく保護者の方からのお話を伺いたかったので、子どもを迎えに来る時間を見計らって訪問し、調査への協力を依頼した。

インタビューや調査から得られた声を整理してみると、住民が考える柏尾川の問題点として衛生面（雑草、水、ゴミ）や安全面（交通、水難、治安）があげられた。住民の要望としては、イベント開催に関するもの、川・水に関するもの、周辺環境に関するもの、ゴミに関するものが挙げられた。例えばゴミ問題による影響としては、子どもを安心して遊ばせることができないことや、カラスなどの鳥がゴミに寄ってくるので怖くて柏尾川に行くことができないなどの声、治安問題に関しては外灯が少なく夜道が危ない、不審者が出ているから対策をした方がよいなどの声が住民から挙がっていた。

調査結果が明らかになった後には、調査を通して得られたことについて柏尾川を利用する人々や住民、行政にフィードバックとしたいと考えて報告書を作成していたが、さらに私たちは調査結果を発表する場を得ることができた。11月24日に柏尾川ジョギングコース計画の協議会が戸塚区役所にて開かれた。その会議には調査を依頼した町内会長をはじめとした何人かの町内会長、土木事務所や地水事務所、戸

塚区役所区政推進課の職員の方々が出席していて、私たちはそこで調査結果を報告させていただくことができた。またその後行われた話し合いにも参加させていただくことができ、調査により得られた住民の声を紹介しながら、議論にも加わらせていただいた。この他にもボランティアセンターが主催したボランティアチャレンジファンドの中間報告会において当日来場した明学生や戸塚区役所、住民の方、学校の先生などに調査から明らかになったことを伝えることができた。

現状認識と今後の課題としては、調査により得られた住民の意見や問題解決の可能性、要望を住民や行政に届ける機会がさらに必要なのではないかと考えている。加えて町内会長や行政の人々だけでなく、インタビューやアンケートに協力して頂いた住民の方々に、調査結果をフィードバックする必要があると考えており、その方法を検討中である。さらに調査でだけでなく、今後の柏尾川の保全か活用等に関して、私たち学生はどのように関わっていくという課題もある。例えば、調査では柏尾川周辺環境の整備という課題が浮き彫りになった。自らが清掃活動に参加したり明学生に清掃活動を呼びかけることなど、できる限り対応をしていきたい。また住民からの期待の声が多かった「柏尾川周辺でイベント開催をしてほしい」という意見については、キャンドルナイトなどに関係する団体に声をかけることなども考えられる。

今までの活動を振り返ってみて、この地域での活動を通して得た学びとは何であろうと考えてみた。計画が持ち上がった際には、広く地域の住民の意見を取り入れながら計画を決定、実行をすることが大切だということを強く感じた。もし私たちが柏尾川周辺住民に対する調査をしなかったら、行政や一部の住民の人々の意見だけで計画が進んでしまっていた可能性もある。今回調査したことにより地域住民の声を計画を立てる立場の人に伝えることができたと感じている。またこのように住民の声を集めても、現実的に計画を実行していくのは行政でありその力は大きいということにも気づいた。だからこそ幅広い住民の声を計画を決めるキーパーソンに伝えることがより大切なのでないかとも考えた。

柏尾川ジョギングコース計画の協議会にて
調査結果を報告している様子

（08 生平山ゼミ　国際学部国際学科２年　松見瑛莉子）

トライ！トライ！！トライ！！！

1．はじめに

私たち「NPO 法人つばさ支援グループ（以下、つばさ支援グループ）」は東京の飯田橋を中心に活動している「NPO 法人つばさ（以下、つばさ）」のメンバーである知的障害児・者の余暇支援を行っている学生ボランティア団体である。今回のボランティアファンド学生チャレンジ賞では知的障害児・者とそのご家族と共に汗を流す運動会を企画した。この企画は普段家にこもりがちな知的障害児・者の運動不足を解消し、社会性を身につける機会につなげることが目的である。

2．活動実績

● 実施過程

まず、実施場所の確保として 2009 年 9 月 16 日に明治学院大学白金校舎の体育館の使用を申請した。その申請により、2009 年 10 月 10 日（土）の 9 時～ 10 時に明治学院大学の白金校舎体育館で行うこととなった。そこで、その週から広報を開始し、参加していただける親子とボランティアを募集した。親子の募集は大塚特別支援学校・港特別支援学校・品川児童園・更生施設　はつらつ太陽にチラシを配布し広報していただいた。その他にもつばさの親御さんに声をかけて王子第四特別支援学校などに広報していただいた。学生ボランティアの募集は学内ポータルサイトポートヘボンやボラセンを利用した。また、つばさ支援グループメンバーの知り合いにも声をかけた。広報活動をする一方で運動会の種目決めをし、ラジオ体操・障害物リレー・しっぽとりゲーム・ボーリング大会・玉入れの 5 種目に決定した。その決定に基づきルール作り・玉入れの玉・しっぽとりのしっぽ・はちまきといった道具を作成した。当日を迎えるにあたって参加する学生ボランティアを集め事前にタイムスケジュールやルール・役割の確認を行った。

● 当日の様子

当日は 11 組 12 名（つばさ 6 組・つばさ以外 5 組）の親子と 23 名（つばさ支援グループ 15 名・つばさ支援グループ以外 8 名）のボランティアに参加していただいた。子どもの選手宣誓から始まり全員でラジオ体操をした。種目は赤チームと緑チームに分かれて対抗戦で行い、親御さんにもほとんどの種目に参加していただいた。特にしっぽとりゲームと玉入れは終わりの合図を出してもみんなの耳に届かず続行されるほど盛り上がっていた。各種目の得点集計も子どもが進んで行ってくれ、運動以外でもコミュニケーションを取ることができた。景品としてお菓子の詰め合わせ・明学グッズを用意した。また、運動会の後は食堂に移動して昼食をとった。13 時くらいまで食堂や生協でそれぞれ購入した昼食を食べながら話をし、親御さん＆ボランティア＆子ども三者の交流をより深めることができた。

● 会計報告

ボランティアファンド学生チャレンジ賞によって、５万円を助成していただいた。内訳は広報費に9482円、レク準備費に１万3343円、交通費に１万5000円、感謝状作成費に１万1864円使用し、合計で４万9689円使用した。

３．今後の課題

今回の企画はつばさ支援グループにとって新しい試みであり成長の機会となる貴重な挑戦であった。しかし、地域との結びつきをより強固なものにするためにはこうした企画を今後も継続していくことが大切であると感じる。そのためにつばさ支援グループ内でボランティアが自発的に行事を企画出来る様な共通認識やそれぞれの強い当事者意識と行動力が求められる。また、今回参加してくれた親子の方とも、つばさ支援グループの活動に参加していただき関係を継続してゆくために、様々な企画に招待する等、連絡を取り続けたいと思う。

４．地域と関わることによって…

今回、板橋区や文京区といった特定の地域の方々しか参加することができなかった。また港区在住の親子の参加がなかったことが残念であったが、港区在住でボラチャレの審査委員も務めていらっしゃった福井さんにお越しいただけたことで大学近隣の地域の方につばさ支援グループを知っていただき結びつきを持つことができた。また、今回の企画を通して、今までのような受け身で行っていた余暇支援のボランティアではなく進んで新しい参加者を募ったことで身近なところに社会参加や身体を動かす機会を必要としている知的障害者の方やそのご家族がいることを知った。私たちの活動は些細な活動ではあるが、つばさ支援グループやつばさに携わるメンバーにとって学校や他の施設では得られない成長の機会を果たしていると感じることができた。

---

[i] つばさ以外の参加親子の内訳

１組は大塚特別支援学校での広報がきっかけで参加、残り４組はつばさの親御さんからのご紹介で王子第四特別支援学校より参加。

[ii] ボランティアの内訳

つばさ支援グループ15名→４年３名、３年４名、２年４名、１年４名

つばさ支援グループ以外８名→明学４名（心理学科２年）、その他４名（日本大学・駒澤大学・帝京大学・社会人）

（NPO法人つばさ支援グループ　社会学部社会福祉学科３年　中井彩果）

「ひろがれ！布ナッププロジェクト」

私たち「あちょみだ」はタイ北部山岳少数民族の少女たちを対象に「自分の体は自分で守れる素敵な女性になろう」をコンセプトにさまざまな活動を行っています。活動は私たち日本人とタイ人の女性が保健・食育をテーマに学び、自分の体について関心を持ち安全に暮らしていくことを目標としています。その活動の一つとして布ナプキン啓発活動があります。すべての女性にとって布ナプキンは紙ナプキンと比べて多くの利点があります。紙ナプキンの使用により起こる健康上の問題の改善、ゴミがでないことから環境にも優しいと言えます。布ナプキン講座をきっかけに月経の仕組みや自分の知らないところで体が危険にさらされている事を知ってほしい、また自分の体に関心を持ってほしいという思いでタイ現地を中心に活動をしてきました。子どもから大人へと成長していく際の体の変化に対する戸惑いや不安、体について誰に相談してよいか分からないという悩みは女性なら誰しも抱えている問題です。このように国が違っても女性たちが抱える問題には多くの共通点があり、日本とタイ両国で布ナプキン啓発活動を実施する必要があると考えています。また私たちの身近にいる大学生に啓発するだけではなく高校生や思春期の子どもがいるお母さん方とも関わることで女性が自分の体に関心を持つきっかけづくりになればと思い、大学近隣地域でもこの活動を実施しています。

大学や「ボラフェスタ in KANAGAWA 2009!!」（以下、ボラフェスタ）での布ナプキン講座ではあちょみだメンバー手作りの布ナプキンと布ナプキンテキストも配布しました。同世代の女性たちがどのような体の悩みをもっているのか、体についてのどのような知識を必要としているかなどの調査させてもらいました。10 月から 12 月に横浜校舎と戸塚のコミュニティーで布ナプキン講座を実施、横浜みなとみらい地区の大勢の人が集うボラフェスタでも布ナプキンのメリットなどを学生、来客者に伝えました。横浜校舎近隣にある地域活動支援センター「横浜 YMCA ワークサポートセンター（パン工房 Ange)」（詳細は本書 50 ～ 51 ページ）の女子通所者にも布ナプキン講座を実施しました。Ange では私たちと同世代の人たちが職業訓練を目的にパン屋さんで働いています。Ange の皆さんとは以前から季節ごとのイベント等を通して交流があったので、今回は若い女性同士共通の悩みを持つ Ange のメンバーと楽しく話をしながら女性の体について関心を持ってもらう機会として交流会を行いました。1 月から 4 月は引き続きメンバーの母校や関心を持ってくれた高校など布ナプキン講座を行うとともに、活動先でも布の寄付を募る予定です。

<u>活動実績</u>

10 月…明治学院大学（横浜校舎）での「布ナプキン講座」

11 月…日本丸メモリアルパークにて行われた大学生と日本赤十字献血センターとの共同で企画した「ボラフェスタ in KANAGAWA 2009!!」にて学生、地域の方に布ナプキンの啓発

12 月…「Ange」メンバーとの交流会にて「布ナプキン講座」を実施

１月～３月…「あちょみだ」メンバーの母校や依頼のあった高校で布ナプキン講座を実施（予定）

活動を通して感じたこと／地域での活動からの学び

これまで布ナプキンのメリット、自分の体について関心をもつよう啓発し同世代の女性たちから多くの反響がもらうことができ、私たちが今後どのように布ナプキン活動を展開していくべきなのか学びました。学内の講座でアンケートを実施したところ、このプロジェクトを行って良かったと思う内容の記述が多々ありました。「はじめに布ナプキンの存在を知った時は絶対に使わないと思ったけど今回の講座を聞いて使ってみようと思った」「お母さんや姉妹にも教えてあげようと思った」などの声があり、私たちの活動が良い形で展開していることを確認できました。実際に布ナプキンを使用しての感想などをもとに、さらに改良を重ねてより良いものを伝える努力をしているところです。学内の講座は初回は参加者が集まりましたが二回目は人数が少なかったので、講座の宣伝方法や場所をもっと工夫する必要があると感じています。ボランティアセンター主催の中間報告会では高校生の参加者から「私たちの学校での布ナプキン講義をしてほしい」という依頼がありました。今後は地域の学校などもっと幅広い年齢の女性に対し啓発していきたいと考えています。「布ナプキンを通して自分の体について関心をもつ」、この目的をもっと意識し体についての悩みなどについて話し合う場なども設けられればさらに充実した啓発運動ができるのではと考えています。

地域と関わることによりさまざまなことを学びました。女性として抱えている問題には年齢に関係なく多くの共通点があること、また地域の方々が私たちの活動を応援してくれることが分かりました。普段は時間が合わず話す機会が少ない「YMCA ワークサポートセンター Ange」のメンバーとは、どんな悩みをもっているか、今後大学生とどのように関わっていきたいかについて話し合いました。Ange のメンバーからは今後もこのような場を設けてほしいとの声があり、今後も交流を続けていきたいと思います。

体や性について知ることに対して閉鎖的な日本では私たちの活動がどのように受け入れられるか不安な気持ちがありましたが、活動に共感をしてくれたので地域でもっと様々なことが展開できると確信することができました。

（あちょみだ　文学部芸術学科２年　越水裕美）

「あちょみだ布ナプキン講座 in 明治学院大学」明治学院大学内にて布ナプキン講座と同時にあちょみだ現地プロジェクト報告会を実施しました。

「あちょみだ HEALTH プロジェクトテキスト」ボランティアファンドを活用して製作したテキストです。あちょみだの紹介、布ナプキンの利点と使用方法、女性の体についての豆知識などが詳しく記載されています。

「Ange」メンバーと布ナプキン講座
Ange との交流会ではお互いの生活スタイル等について話をしました。これからもこのような交流を続けていこうと互いの関係が一層深まるイベントとなりました。

パールビーズの森プロジェクト 広がる！つながる！ MG パールブランディング化計画！

【企画の目的と内容】

私たち MG パールは、マレーシアのボルネオ島を活動場所として、森林伐採の進行を食い止め、現地の野生生物たちを守ろうとしている NPO 法人ボルネオ保全トラストジャパン（以下 BCT ジャパン）と、明治学院大学ボランティアセンターの三者協働で、「パールビーズの森プロジェクト」を実施している（プロジェクト詳細は本書 22 ～ 23 ページ参照）。

私たちはボルネオ島の森林伐採が自分たちの生活と密接に関係していることを知り、ボルネオ原産の淡水パールを使って明治学院大学の学生たちが手作りしたオリジナルパールアクセサリーを製作し、その売上は森を買う資金として寄付している。今回私たちは、オリジナルパールアクセサリーを「MG パール」として、独自ブランドを立ち上げようと考えた。私たちの活動の象徴であるパールアクセサリーをブランディングすることで「明学生による活動」をより明確にでき、学内認知だけでなく、地域に根付いた大学の学生による活動として地域の方に知ってもらいやすくなるのではないかと期待したからである。

またこのプロジェクトに参加している大学は現在のところ明治学院大学だけであるが、今後他大学にも広がっていく可能性があるため、先駆的モデルとしての基盤づくりに貢献できたらと考えた。

そのためのツールとして考えたのが、MG パールのゴマークが入ったはがきサイズのチラシ資料作成であった。販売活動を通して口頭でプロジェクトの説明はするものの、時間がかかってしまったり、その内容を忘れられてしまったりすることも多い現状もあり、その解決の一助にもなると考えた。さらに商品の台紙としても使えるような工夫をすることで、資料の利用方法にも幅が広がり、商品のイメージアップや販売促進にもつながると考えた。

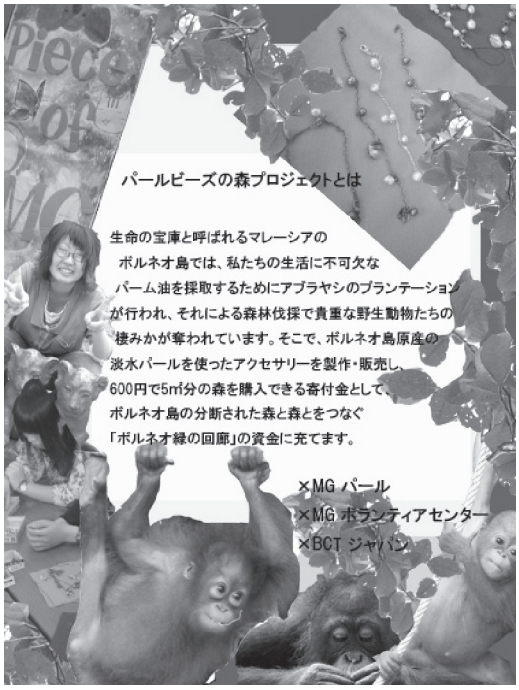
そして学内だけでなく地域の方々にもこのプロジェクトを広く認知してもらえるようになり、私たちの豊かな生活のために多くの犠牲がある、という事実を知ることで生活の中に意識を向けるようになることや、それによって私たちのプロジェクトに賛同してもらえるための手段になることを期待した。

今回は 2009 年 12 月 6 日 (日) に行われた MG パールと明治学院大学ボランティアセンター、そして BCT ジャパンとの共催のイベント「ジャングルクリスマスフェスタ in 白金 2009」で使うことを目標に、一種類の両面印刷フルカラー仕様のチラシを製作した。

【企画の経過】

10 月の初めごろから数種類のラフ案を作成し、メンバーに意見を求めるところから始めた。その中から良いデザインを選び、パソコンを用いて完成品のもととなるデータを作成した。この時に利用したものは、主に写真加工用のソフト「Adobe Photoshop elements Ver.7.0」とパソコンに繋いでイラスト製作の補助をする機材、ペンタブである。他にも完成品により近い見本を作るために写真用の光沢紙を使

用した。その後、11 月の終わりごろにデザインを確定し、印刷業者に受注した。以下 2 枚が実際のチラシである。左がプロジェクト説明用として裏面印刷用にデザインしたものであり、右が商品の台紙として表面印刷用にデザインしたものである。



【企画を通して得た学び】

今回イベントで使用してわかったのは、手書きのチラシよりもパソコンを用いて作成したチラシの方が明らかに販促、知名度向上に繋がるということであった。もちろん手書きでも十分に MG パールの活動内容や商品の紹介をすることができる。しかし従来行ってきたこの方法では、商品を購入して下さる地域の方に伝える、という部分でのインパクトや団体に対する認知までには至らず、販売促進にも思うようにつながらなかった。今回イベントで使用してみて、商品を乗せるにしても配るにしても見栄えがよく、配る時も一旦足を止めてチラシを見てくれる人が多く、よりスムーズに説明を行うことができた。

【今後の課題】

今回のチラシ資料の作成において、商品に見合う適切なチラシのデザインを考える難しさに直面したのはもちろんだが、何より MG パールとしての段取りの悪さやチームとしてのコミュニケーション不足が問題となった。受賞が 7 月であったにも関わらず、実際に取り掛かったのは 10 月後半になってしまい、直前の仕上がりになってしまったことや、情報の共有不足のために一人がすべての過程を請け負う形となってしまったことが課題となった。しかし、問題を抱えながらも完成したことによって、達成感や充実感を得たことが大きく、今後の段取りの方法やチームワークの取り方をなどの工夫につなげていきたい。

（MG パール　心理学部心理学科 2 年　岩永春香・割田智子）

届けよう！音楽の楽しさを～ Music Delivery Project ～

１．活動のねらい

そらいろ音楽隊を立ち上げたのは、おととしの 12 月に小田急分譲地の住民の方たちが行っている活動“しあわせの会”にて、高齢者の方たちを前にフルート演奏をしたことがきっかけとなっています。演奏後、利用者の方や、スタッフの方が何度も「また演奏してね」と仰って下さったことから「もっと多くの人数で演奏をしたら、より楽しんでもらえるのではないか。様々な楽器を演奏出来るメンバーを増やすことで、多岐に渡る音楽を楽しんでもらえるのではないか」と考えるようになりました。また、外出することの難しい高齢者の方や障害を持つ方など、普段生の音楽を聴くことの出来ない方々に届けたいという思いを持ち、立ち上げに至りました。音楽を届けることによって、共に楽しんでもらいたい。同時に、今まで関心を向けていなかった曲・音楽に興味を持ってもらいたい。音楽を届けることで、日々をより楽しく生きるための糧にしてほしい、という思いを持ち、活動を進めてきました。

２．活動内容

ボラチャレ受賞後の７月から活動を始めるべきだったのですが、代表である私が積極的に動かなかったために、メンバー募集も演奏も企画せずしばらくの間活動が前に進んでいませんでした。けれどもそのような中でコーディネーターさんと話すことでボラチャレ応募時の気持ちを思い出し新たに決意を固め、11 月頃からメンバー募集を開始しました。募集チラシをチャペルなどに置かせていただき、友人に声をかけましたがなかなかメンバーを集めることが出来ませんでした。しかし最終的には友人が協力をしてくれることになり、私を含め、フルート・ヴァイオリン・ギター・マンドラテノールの５人のメンバーを集めることが出来ました。初めの演奏活動として、12 月 12 日に横浜で行われたサンタの装いをしてボランティアが施設訪問する“横浜サンタプロジェクト”へ参加しました。参加のきっかけはそらいろ音楽隊の活動内容に関心を持った方にコーディネーターさんが引き合わせてくださったことでした。私たちは“三春学園”という児童養護施設に伺い、クリスマス曲をフルートとヴァイオリンで演奏し、一緒に訪問した合唱団の方と合奏をしました。初めは興味を持ってくれるのだろうかと心配していたのですが、子どもたちは真剣に私たちの演奏を聴いてくれました。ある子は「とても素敵でした」と笑顔を向けてくれ「また来てね」と手を振ってくれました。次に、12 月 21 日に横浜市下倉田地域ケアプラザに伺いデイ・サービスの時間に演奏させていただきました。以前ボランティアさせていただいたことがあったので、直接相談し、すぐに演奏の機会を作って下さいました。この時はご老人の施設であることを考慮し、簡単な童謡を演奏に合わせて歌っていただき、英語の曲を聞いていただきました。利用者の方たちは、歌詞カードを見ながら演奏に合わせて歌って下さりとても楽しんでおられるご様子でした。利用者の方の中には「嬉しいね、学生時代に戻ったみたいにはしゃいだわ」と涙ぐまれる方や「ありがとう」と何度も言って下さる方が居てとても嬉しくなりました。「歌うと演奏が聞こえなくなっちゃうわね」という声もありましたので次回に生かそうと考えています。普段は、主に演歌を歌う

ことが多いとのことなので、少し違う“楽しさ”を感じていただけたのではないかと思います。今年に入ってからは、1月21日に横浜校舎で行われた小田急分譲地“しあわせの会”のスタッフさんを大学にお招きする、あったかサークルひまわり主催の“あったか交流会”に参加しました。しあわせの会にはこれまで何度も参加させていただいていることもあり、演奏をさせていただけました。この際もフルート奏者一人で参加しました。交流会では、春に向けての二曲をフルート演奏と共に歌っていただき、一曲は“しあわせの会”にちなみ、演奏者が聴くと幸せになる曲を演奏しました。交流会の方々は、大きな声で歌ってくださり、喜んで下さったご様子で「また、しあわせの会でも演奏してね」と口々に仰って下さいました。

こうして地域で演奏訪問をしてきた中で、利用者の方やスタッフの方から「外部から来た人に演奏してもらうことは良いわね」と言われたことがありました。外部からのボランティアが来て、普段の生活とは少し異なるイベントを催すことは、良い影響になっているようです。

３．地域から得たこと、学んだこと

まず今までは大学に行くために利用する街でしかなかった戸塚に、親近感を持てるようになりました。この街には私の知っている人が住んでいる、そう実感することにより、“第二の自分の街”のように感じるようになりました。また“コミュニケーション”の大切さを学びました。活動で訪れた場所は、ほぼ初対面の方たちがいらっしゃる場所でした。普通なら、自己紹介から始まり、なんとなく他人行儀な関係から入っていくと思います。けれども、“音楽”を通して、共に演奏を楽しむことによって、一体感が生まれたようになりました。また演奏して終わりではなく、演奏を通して、訪問先の方たちがどのように感じたのか、楽しんでもらうことが出来たのかを考えることは、とても重要だと感じました。

４．今後の課題

まず活動の場所を白金校舎付近にも広げていくことです。学生スタッフの時の友人伝えで南麻布にある幼稚園を教えてもらい、2月24日に演奏訪問をさせていただくことになっています。これをきっかけに、今後は白金校舎付近でも活動を広げていきたいです。次にメンバーを集めることです。より多くの楽器を演奏できるメンバーを集め、より楽しい音楽を届けていきたいです。最後に、楽譜のアレンジについてです。これまでは、楽譜をほぼそのまま使うだけでしたが、今後はきれいなハーモニーや、新しいメロディーを加え、単調ではなく、聴いている方たちの楽しめるアレンジ方法をしていきたいと思っています。今後も積極的に活動を行いますので、よろしくお願いします！

（そらいろ音楽隊　国際学部 国際学科３年　長田ありさ）